

## 自閉症児へのダンスセラピー的アプローチに関する事例研究<sup>†</sup>

狐塚登喜枝\*・茅野 理子\*\*

宇都宮市立中央小学校\*

宇都宮大学教育学部\*\*

本報告では、自閉症児の療育の一方法として、ダンスセラピー的なアプローチを試みた結果について事例報告する。実践は、音楽的な心地よさによる身体表現と手遊び歌を応用した触れ合いにより行った。その結果、活動における従事時間の持続力が図られるとともに、対象児の動きに合わせるということで、他者との共感を期待できる効果が認められた。一方、指導者側が指導的に関わろうとすることは、反発を招き、逆効果であることが認められた。

キーワード：自閉症児、ダンスセラピー、リズム、音楽療法、手遊び、触れ合い

### 1. 緒言

LD, ADHD児にみられるようなコミュニケーション障害が教育的課題となつて久しい。

一方、今日では、健常児においても他者とうまく関係を結ぶことができない場面を多く観るようになってきた。「キレる」という言葉に示される、コミュニケーションの崩壊は、現在年齢を問わず、深刻な社会問題ともなっている。

このような、現代が抱える問題やストレス社会を反映してか、学校教育では「体ほぐしの運動」が、また、社会では「体ほぐし 心ほぐし」のワークショップ等の運動が、盛んに行われるようになってきている。

特に、ダンス（小学校では「表現運動」）、身体表現の領域が、コミュニケーションに問題や障害のある子どもたちに有効に働くことは、多くの先行研究<sup>3, 5, 9, 10, 11)</sup>によって指摘されている。

これを踏まえて、本研究では、対人関係やコミュニケーションを苦手とすることが特徴とされる自閉症児を対象として、ダンスセラピー的な身体表現による関わりの事例について報告することを目的とした。こうした事例報告はまだ少なく、有効性を検証することで、今後の支援の一助としたい。

### 2. 研究方法

平成18年度U大学で行った自閉症児Sとのセッションでの実践をVTRに収録し、指導者であるMain Trainer（以下MT）・Sub Trainer（以下ST）の関わりとSの行動や表情から分析した。実践は、4月25日から7月11日までの計10回のセッションであったが、本報告では筆者が直接MT・STとして身体表現を意識して関わった6回目から8回目、そして、他のペアでのMT・STのなかで、身体表現による関わりが見られた9回目の様子から検討する。実施日等を以下に示す。

#### (1) 実施日時（各14：40～15：30）

実践① 平成18年6月6日（第6回）

実践② 平成18年6月13日（第7回）

実践③ 平成18年6月20日（第8回）

実践④ 平成18年7月4日（第9回）

#### (2) 場所 U大学内のプレイルーム<sup>11)</sup>

部屋は活動を分かりやすくするため、課題エリア・おやつエリア・遊びエリアに区切られている。

(3) 対象児 S（10歳男児）2歳半時に広汎性発達障害<sup>12)</sup>と診断される。

(4) 活動 指導者はMT・STとして2人でSに関わる。毎回約40分間 ①課題エリア(約25分)→②おやつエリア(約5分)→③遊びエリア(約10分)→④帰宅の順に活動が進められた。

(5) 方法 MT・STは親との事前打ち合わせをもとに計画書を作成。セッション終了後は、記録ビデオ

<sup>†</sup> Tokie KOZUKA\*, Masako CHINO\*\* : A Study on Dance Therapeutic Approach to the Autistic Child.

\* Utsunomiya-Chuo Elementary School

\*\* Faculty of Education, Utsunomiya University

オから計画及び支援が有効であったかを検討し、報告書にまとめる。

なお、遊びエリアでの身体表現的な関わりは、CDでSの好みそうな曲を用意して試みる。あくまでも、Sが自主的にSuper Talker<sup>13</sup>の「音楽を聞きます」のボタンを選んだ時のみ行う。また、セッション中は、身体接触を意識した関わりを心がけた。

### 3. 結果及び考察

#### (1) ダンス・セラピーの概要

ダンス・セラピーは、「個人の心身の統合を促進する過程でムーブメントを心理療法的に用いることである。」<sup>4 p.210</sup>と定義されている。その始まりは、『dance is communication』という概念をもつチェイス (Chace, M) が主宰するダンススタジオに通う患者の観察から、ダンスに関心を抱いた精神科医が、エリザベス病院にチェイスを招き、入院患者を対象にダンスの指導を実践したところから<sup>4 p.210</sup>であり、そして、「ダンス・セラピーの草創期の人々の多くは、『ダンスは心の内にあるものを身体で表現する』というダンス観をもつモダンダンサーであった。彼らが精神分析学派や人間性学派等の心理学者の理論や技法を取り入れて、次第にダンスと心理学の分野で固めた基礎知識をもち、ダンス・セラピーの理論と方法を確立し発展させてきたものである。」<sup>4 p.211</sup>

八木は「意識、無意識にかかわらず身体的状態の認知と、これに対する同調が、共感を成立させる重要な要因になっていると言えそうである。(中略)ダンス・セラピーにおける body actionや symbolismが患者とセラピスト、患者同士の間で rhythmicに、同時進行的に生じる過程は、身体的共感の素地として利用されると考えられる。」<sup>11 p.184</sup>と舞踊の基本的特性がダンス・セラピーにおける身体的共感の素地となることを示唆している。

しかし、「臨床場面での実践においては、現段階ではレクリエーションの一部としてとか、音楽療法のある発展型としてダンスを取り入れているというものが大多数で、アメリカで発展してきたような、創造的体験としての認識はまだ不足しているといえるだろう。」<sup>11 p.180</sup>と述べ、「ダンス・セラピーへの関心が高まり情報交換や学会(芸術療法学会・舞踊学会・体育学会)における研究発表もなされてきている。」<sup>11 p.180</sup>と、今後の取り組みが期待されている

ことを示唆している。

#### (2) 自閉症児と表現リズム遊び(身体表現)

財満によると「自閉症児にとって、各種の運動技能を獲得したり、様々な遊びを経験したりすることは、ただ単に運動や遊びが巧みになるだけでなく、自閉性障害の本質的な要素の改善に役立ち、その後の学習に計り知れない意義があると考ええる。」<sup>3 p.80</sup>として6人の意見をあげている。そのうちの4人が『リズムダンス的な運動の推進』をしていた<sup>14</sup>。これらの例からも身体接触やリズム運動など身体表現が自閉症児の成長に深くかかわることが推測できる。

そして、5人の対象児に6つの手遊びで関わりその結果から、「精神発達地帯を伴った自閉的傾向を示す児童に運動模倣の課題の習得を目指した治療教育を行った。運動模倣課題は、動作が刻々と変化し、模倣者が動作の変化に気づき、見ることができたとしても、次の瞬間にはその動作は消失している。たとえ、その動作を見たとしても、それを自分の動作として表現しなければならぬので、運動模倣の習得は自閉児においてはきわめて困難な課題といえる。」<sup>3 p.27</sup>として、「運動模倣課題を習得させるにあたっては、次の点を考慮する必要がある。模倣されやすい動作の順は、走行、両側性運動、正中線交差運動、片側性運動、体側性運動であった。また、模倣されやすい動作の空間は、首から上の空間、首から腰までの空間、腰から下の空間であった。」<sup>3 p.103</sup>とまとめている。

小林は、カラーのムーブメントスカーフを使った運動を行い、「大人も子どもも障害者も一緒にスカーフをお互いに取り合って楽しく参加しています。スカーフを音楽に合わせてゆっくり動かしながら、きれいなウエーブを作ります。2人が呼吸を合わせてスカーフを上下運動させることで、自然にダンスも生まれます。様々な色のカラフルなスカーフが空中に放たれたときには、自分も空中遊泳をしているかのような気分になります。その感動の場面を作ることで、心が豊かになります。」<sup>2 pp.181-182</sup>と、ダンス的な運動の効果を記している。

さらに、「欧米の小学校では、創造的運動を取り入れたムーブメント教育が活発に行われています。歴史的に見れば、スイスのダルクローズ (A.J.Dalcroze) やドイツのラバン (R. Laban) がこの創造的ムーブメントの領域で有名です。ドイツを離れたラバンは、イギリスでこの教育を普及さ

せました。イギリスは、世界の中でも最もムーブメント教育が盛んな国の一つです。彼は、『自由運動はすべての身体運動の基礎である』という考えを持っていましたが、音楽や遊具、運動器具など付加的援助を使わずに、創造的運動の展開を主張した点で知られています。しかし、近年の欧米諸国での創造的運動の教育では、登ったり、跳んだり、動かしたりするようないくつかの遊具や器具、音楽などを導入して、そこからイメージしたり、没頭したり、冒険したりする機会をつくる創造的運動が盛んに行われています。』<sup>2) p.184)</sup>と紹介している。

また、全日本特殊教育研究連盟では「体操やリズム運動の学習は、個別指導よりも集団指導のほうが望ましいのですが、模倣行動が確立しがたい自閉の子の場合は急速な効果を期待できません。集団指導では周りからの刺激を有効に利用して、集団行動の枠をパターンとして定着させていったほうが良いでしょう。音楽や音刺激を好む自閉の子どもは意外に多く、それらの子どもにはリズムを通じて協応運動を高めていくことが考えられます。(坂本龍生)』<sup>5) p.100)</sup>と、リズム運動を通して自閉症児も協応運動を高めることが期待できることを示唆している。

山田は、人とかかわり(視線が合わない、呼びかけても反応しないなど)に問題を持つ子の指導の一つとして、「模倣をさせる。身体動作の模倣、リトミック、手遊び歌などの模倣動作を十分に行います。模倣は、相手を意識するきっかけにもなり、コミュニケーションの形成に大きな役割を果たします。」<sup>5) p.122)</sup>と、その有効性を示唆している。このことは、対人関係の改善にも有効ではと考えられる。

久芳は、「対人関係を育てることと遊びを育てることは切り離せないものなのです。そこから他者とかかわりたいという欲求を引き出すようにすることが基本となります。対人関係を作り上げていくことと同時に、見立て遊びやごっこ遊びへの導入として、相手の動作を真似する動作模倣などのまねっこ遊びを用います。はじめは挙手などの簡単なものから、『むすんで開いて』などの手遊び、動物の動作や鳴き声の模倣など次第に複雑なものを入れていき、ごっこ遊びにつなげていきます。」<sup>5) p.121)</sup>と、ごっこ遊びや見立て遊びにより、対人関係を育てていることを語っている。挙手・手遊び・動物の動作や鳴き声の模倣などはまさに表現運動である。対人関係を育てるのにも表現運動が役立てられている。

以上をまとめてみると、身体表現による自閉症児へのアプローチで留意すべきことは、リズムによる同調ということが考察された。

### (3) 自閉症児Sとのセッション事例

#### 1) 昨年までのSの様子

平成17年度卒業論文「自閉症児の遊びエリアにおける指導—構造化による不適応行動の軽減」にて恒川(2005)は、自閉症児SのAAPEP<sup>®</sup>の解釈で、「対人行動では、名前を呼ばれた際検査者を見たり、あいさつに対し頭を軽く下げたりする様子が見られた。しかし、積極的な関わりは見られず、時々床に寝転んだり声を出したり、自分の腿をたたく行動も見られた。学校や家庭でもしばしば不適応な行動があり、集団参加は同席できても他者との関わりを持つことがうまくできていない。コミュニケーションの手段を確立することで、受容・表出のコミュニケーション力を伸ばし、適切な対人行動が取れるようになる」と述べて、結果と考察<sup>6) pp.66-67)</sup>より、「Sにとって分かりやすい構造化を模索することで、問題行動が減少することがわかった。(中略) Super Talkerを選択ボードとして利用したことは、選択し遊びを受け取るコミュニケーションが明確になった点、Sの発語を促した点で大変有効であった。」と、構造化の有効性をあげた。

しかし、「これぞという熱中できる遊びは見つかっておらず、引き続き自由時間の指導及び検討が必要である。」<sup>6) p.67)</sup>となかなか熱中できる遊びが見つからなかったことを指摘している。

#### 2) 対象児Sについて

10歳男児。2歳半時に広汎性発達障害と診断される。重度の知的障害を持ち、療育手帳を有する。無発語。高いところに登る、窓から外に出ようとする、つばはきをするなどの不適応行動が多くみられた。

また、身体表現的活動をおこなうにあたり、事前に母親にSのダンスに対する反応について尋ねたところ、「乳幼児のころは抱っこを嫌がったが、音楽については、アニメーションの歌や童謡などどんなものでも嫌がる様子は見られない。」とのことであった。























#### 3) 結果

以下、Sが自主的にSuper Talkerの「音楽を聞きます」のボタンを選んだ時のみの行動や表情より分析した。



























各セッションでのSの表情によりプラス(笑顔・

※表では  (Sからの関わり),  (MT・STからの関わり) を表す。

(表1) 6/6①セッション：筆者はMT

時間	プラス表情	関わり	MT・STの様子	関わり	マイナス表情
約11分 中	①笑顔		① MTがSの手をとり、向かい合って両手を交わしながらリズムにあわせて上げ下げをした。		
約5分 選択	②嬉しそうな表情		② 両手をつないだままジャンプしたり回ったりした。		
約4割	③MTを見る		③ MTが手を離し、両手タッチを促す。		
	④リズムにのってゆれている		④ CD操作がうまくいかずなかなか曲が流れなかった。		① いらいらした表情
	⑤笑顔		⑤ MTはSの手を握り、「機械故障」と伝える。		② 勝手におもしろさや入ればツックスを覗く
	⑥MTと両手タッチ		⑥ STが操作し曲がかか		③ 勝手にCDの違うボタンを押す
	⑦MTと両手タッチ・MTと手をつないで一緒にジャンプ		⑦ MT両手タッチをしたりジャンプをしたりしてSと踊る。		④ 窓の方へ行き「ウーウー」と怒り出す
	・笑顔		⑧ MTが手を離し、MTの頭を軽くたくたくよ		⑤ 壁を蹴るそぶりをする
	・MTを見る		⑨ MTも同じように壁をけるまねをしてみた。		⑥ 壁を蹴る
	・MTと両手タッチ		⑩ MTはあわてて制止した。		⑦ 途中で手を離す
	・MTと手をつないで一緒にジャンプ		⑪ MTはSの手をとってもう一度踊ろうと試みるが、途中で手を離されてしまう。		
計(回)	1 1				7

(表2) 6/13②セッション：筆者はST

時間	プラス表情	関わり	MT・STの様子	関わり	マイナス表情
約11分 中	① 1回目曲を聴きながら、ケースをパタパタと開けたり閉めたりしていた。		① MT・STがリズムにのりながら少し首を振っている。		
	② 2回目曲の途中で後ろの方にいたSTに手を伸ばした		② ST笑顔を見せる。		
	③ STを見たりする。		③ MT・STはSの様子を見ながら首を左右に振りリズムをとる。		
	④ 首を左右に振る様子が見られた。		④ MT・STはSの様子を見ながら首を左右に振りリズムをとる。		
	⑤ 嬉しそうな表情				
	⑥ 時々MT・STを見る。				
	⑦ 首を左右に合わせ左右に合わせる。				
	⑧ 嬉しそうな表情				
	⑨ 曲に合わせ首を振る。				
	⑩ 笑顔。				
	⑪ 首を左右に振る。				
	⑫ 笑顔。				
	⑬ STに握手を求めて手を伸ばす。		⑬ STはSの様子に応じて握手した。		
計(回)	1 2				0

(表3) 6/20③セセッション：筆者はMT

時間	プラス表情	聞き	MT・STの様子	聞き	マイナス表情
約11分 中	①笑顔。	↑	①MTはリズムを取り笑顔で揺れながら、Sを見る。	↑	
約8分 選択	②MTの手にタッチする。	↑	②MTが座ったまま、体でリズムを取り、Sに両手のひらに向けタッチを要求する。	↑	
約7割	③MTの手に手をのせる。	↑	③リズムにあわせMTが立たせようと手を出す。	↑	①立とうとしない ②足をバタバタさせる。
	④首でリズムを取りCDケースを見ながら聞く。	↑	④MTが立ち上がろうと腰を上げたがSの様子から座っていたいものと判断し、MTも膝をつきSの手を離し、リズムにあわせ手拍子をした。	↑	
	⑤止めないように手で押さえる。	↑	⑤MTが曲にあわせ指数字で1を出す。	↑	③突然「ウー」という。 ④背中を向ける。 ⑤CDをすぐに交換しようとする。
	⑥別のCDケースを持ち曲の切のいいところろで交換しようとする。	↑	⑥MTは、他のCDが聞きたいかと思いいい途中でも止めていいことを伝え、CDを止めてやろうとする。	↑	
	⑦終わりのタイマーがなるとスムーズに退室する。	↑	⑦MTはそのまま続けることにし、再び曲にあわせ指数字を出したわり、5本の指でSの背中を「チュッチュチュ…」に合わせ軽くたたいたりした。	↑	
計(回)	7				5

(表4) 7/4④セセッションMT・STは他のペア

時間	プラス表情	聞き	MT・STの様子	聞き	マイナス表情
約13分 中	①笑顔。	↑	①MT・STは静かに見守る。	↑	
約9分 選択	②嬉しそう。	↑	②MT・STも揺れている。	↑	
約7割	③笑顔。	↑	③「チュッチュチュ…」のところで、MTがくすぐるようなまねをする。	↑	
	④MTの関わり合いに合わせ、両腕を胸の前でギョッとクロスさせる。	↑	④MT・STともリズムにあわせて首を振り揺れる。	↑	
	⑤リズムに合わせ足をトントんと鳴らす。	↑	⑤MTがドンドンするとCDが止まってしまったことを伝える。	↑	①手で床をドンドンたたきCDを止める。
	⑥CDを聞きたいぞぶりを見せる。	↑	⑥タイマーがなりMTが「終わり?」と聞く。	↑	
	⑦首を左右に振る。	↑	⑦MTはSの要求を受け入れる。	↑	
	⑧MTの手をとる。	↑	⑧MT・STともリズムにあわせて首を振り揺れる。	↑	
	⑨首を上下に振る。	↑		↑	
	⑩笑顔。	↑		↑	
	⑪終わりのタイマーがなるとスムーズに退室する。	↑		↑	
計(回)	11				1

好意的行動)とマイナス(攻撃的・拒否的な行動)とMT・STの関わりを分析し、表1～表4にまとめた。

① セッション① (表1参照)：筆者はMT

初めて「音楽を聞きます」を導入し、Sの反応を見たところ、最初MTと手をつなぎ音楽に合わせて楽しそうな様子を見せた。2回目CDがうまく作動せず多少の混乱を見せたが、その後何度も「音楽を聞きます」を要求し興味を示した。手をつないで腕を上下させたり、回ったりしたときは、喜んでいる様子だった。しかし、MTが手を離し、手を頭にのせる動きをしたとたんに、窓の方へ行ってしまった。その後は、壁を蹴るような動作が見られた。次に、MTが違う遊びを誘ったが、その後もまた「音楽を聞きます」の要求があった。

② セッション② (表2参照)：筆者はST

前回のセッションで、SがCDに興味を持っている様子だったことと、母親の希望で、CDの出し入れを含めた操作をSにさせることとした。CDを2枚用意し選ばせて、床で操作させた。そのため、座ったままSの様子を見ながらゆれ(音楽のリズムに合わせて首を左右に振るなど)を意識して関わった。とても落ち着いた様子で、時々MT・STに笑顔を見せた。また、SからSTに握手を求める様子も見られた。何度も「音楽を聞きます」を要求し、穏やかな様子であった。別室のTVで見ていた母親もとても喜んでた。

③ セッション③ (表3参照)：筆者はMT

SがCDに興味を持っていることがわかったので、さらにCDを3枚に増やした。3枚とも選び聞くことができた。MTが曲により、首を左右や上下にふり、上半身も揺らしてみたり、タッチを求めたりした。SはMTをあまり意識せず曲を楽しんでいる様子も見られたが、タッチを求めるとそれに応じたり、ときどきMTのほうに笑顔を見せたりした。

しかし、「のねずみ」の曲で、MTが指数字を出したとき、とたんに背を向けてしまった。MTは、気に入らない曲だったのかと思い、途中でCDを変えてもよいことを伝え、MTがCDを止めようとした。しかし、Sは続けて聞きたいという様子を見せた。MTは、「チュッチュチュッチュ」のところでSの背中を指先で軽くたたいたが、反応はみられなかった。タイマーの合図でスムーズに終了し退室することはできた。

④ セッション④ (表4参照) MT・STは他のペア

前回休みで1週間あいてしまったため、今回もCDは実施③(6/20)のときと同じ3枚にした。「のねずみ」は前回の様子から選ばないかもしれないと思ったが、もしも選んだら「チュッチュ チュッチュ」のところで関わってみてほしいことをMTに伝えておいた。Sは、前回と同じく3枚とも聞いた。Sの様子にあわせMT・STが首を振りリズムをとると笑顔を見せた。また、「のねずみ」では、MTが「チュッチュチュッチュ」のところでくすぐるようなそぶりに関わると、とても嬉しそうにちょっと後ずさりをした。次の「チュッチュチュッチュ」のところでは、くすぐられることを期待しているように、体を縮め喜ぶ様子が見られた。

表5 プラス表情とマイナス表情の回数

実践日	6.6①	6.13②	6.20③	7.4④
プラス表情	11	12	7	11
マイナス表情	7	0	5	1

4) 考察

① 音楽を伴った身体表現の効果について

Sが音楽を嫌いではなかったことで、今回のセッションでは音楽を使つての関わりを試みた。Sは最初からCDに興味を示し、大変喜んでた様子であった。4回とも、ところどころで首を左右に揺らしながら、MT・STへ向けての笑顔が見られた。このことから、身体表現的な関わりがコミュニケーションに有効であったと推察される。

これまでに一つの遊びを持続させることがほとんどなかったSであった<sup>6)67)</sup>が、1回目の(表1参照)では遊び時間の約4割、2回目(表2参照)では約8割、3回目(表3参照)・4回目(表4参照)では約7割「音楽を聞きます」を選択し楽しんでた。このことから、今回のCDを使つての身体表現的な関わりがSの遊びを持続させるために効果的であったといえる。

「音楽や音刺激を好む自閉の子どもは意外に多く、それらの子どもにはリズムを通じて協応運動を高めていくことが考えられます。」<sup>5) 104)</sup>とのことから、リズムカルな曲のCDを用意した。CDを聞いていたとき、どのセッションでもSがMT・STの方を見て揺れ、MT・STも一緒に揺れると笑顔を見せたことで協応運動の効果が窺われる。

② 身体接触を意識した関わりについて

自閉症児は、対人関係に問題があるため、なかなかお互いに信頼関係を気付くことが難しいと思われ

る。その上、MTとして2回、STとして1回の計3回のみに関わりで、セッションは週に1回のペースでおこなわれた。このように、ほんの短い関わりであっても、2回目のSTのときに、Sから握手を求めるような行動が見られたことは、身体接触を意識した関わりの効果があったと推察される。

表4にみられるように、Sが「チュッチュチュッチュ」のところで、MTがくすぐるようなまねをすると、嬉しそうに後ずさりし、次にもう一度されたときはニコニコしながら両腕を胸の前でギュッとクロスさせ縮こまった。これは、くすぐられることを期待して体を締め喜ぶ様子とみることができ、感情の保存ができたのではないかと推察される。

曲の最後まで楽しそうであった。

### ③ マイナス表情より

表1のマイナス表情⑥については、MTがSのマイナス表情⑤のまねをしたため、エスカレートさせてしまったことが窺われる。また、制止したら次の活動を促すことができたことから、マイナス表情についてはまねをしないで、やめさせたい行為については、制止することが大切であることを再認した。

表5より、2回目にマイナス表情が0だったにもかかわらず、3回目に5回と増えてしまったことは、2回目は筆者がSTであり補助的に余裕をもって関わられたが、3回目はMTで関わりたい気持ちが強く出てしまったためと考えられる。

同じ曲で違う動きをしたときや手を離し模倣を促そうと試みたときなどSに不適応行動が見られた。また、各セッションともSの様子に注目し指導者が合わせるようにするとプラス表情が多かったことから、八木が「意識、無意識にかかわらず身体的状態の認知と、これに対する同調が、共感を成立させる重要な要因になっていると言えそうである」<sup>11)</sup> p.184と述べているように、相手に感じ、合わせるようにすることが大切であるといえる。

## 4. まとめ

本研究では、対人関係やコミュニケーションを苦手とすることが特徴とされる自閉症児を対象として、身体表現による関わり事例について報告することを目的とした。実践は、音楽的な心地よさによる身体表現と手遊び歌を応用した触れ合いにより行った。その結果、活動における従事時間の持続力が

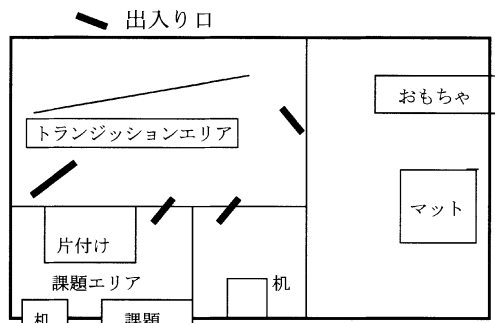
図られるとともに、対象児の動きに合わせるということで、他者との共感を期待できる効果が認められた。一方、指導者側が指導的に関わろうとすることは、反発を招き、逆効果であることが認められた。

## 謝辞

本セッションを行うにあたり、障害児教育(当時、現特別支援教育)講座 梅永雄二教授にご支援をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

## 注釈

注1 プレイルーム



トランジションエリアはセッション全体の活動スケジュールが示されている場所である。

注2 広汎性発達障害<sup>1) p.42)</sup>

広汎性発達障害という用語は、WHO(世界保健機関)やアメリカ精神医学会が正式な診断名として採用しているもので、自閉症とその周辺の障害をひとくくりにすることば。WHOの分類では、自閉症(小児自閉症)、非定型自閉症、レット症候群、アスペルガー症候群などの8つの診断に分かれる(アメリカ精神医学会の分類では5つ)。

注3 Super Talker



8個の遊びの写真があり好きなものを1つ選び押すと、本人が話すことができなくても言葉で伝えることができる。

注4 自閉症児へのリズム的な運動の推進意見の例

(文献3. pp.7-8. 下線は筆者)

- ① Elgar.S & Wing.Lは、自閉症児の「運動や動作によって表現できない障害」に対しては、体操、水泳、ダンス、リトミックなどが有効であるとしている。
- ② 井上は、自閉症児は一般的に身体像の発達が不完全であるとして、Kephartの言う感覚運動訓練、身体接触リズム遊び、精神運動再教育、知覚運動訓練、練動作模倣訓練などを総合的訓練プログラムの中に取り入れることを提唱している。
- ③ 小関はダイナミックプレイ（力動的な遊び）の必要性を述べている。これは、対人認知の促進を主要な目標としつつ、楽しい雰囲気のなかで手や足など身体全体を歌やリズムに合わせてダイナミックに動かし知覚—運動の機能的統合を図ろうとしたものである。
- ④ 佐々木は、自閉症児の全身に皮膚刺激を積極的に与え、発達初期の依存欲求を形成しながら依存体験を充足させることで、同時に感覚—知覚系の統合的な発達を促し、情緒発達の基礎を育て得るという可能性を述べている。さらに、脳機能の切断症状を改善し、全体的な行動機能の形成と発達のためには、あらゆるタイプの意図的な全身運動がきわめて有効であると強調している。

#### 注5 AAPEP (adolescent and Adult Psycho-Educational Profile) <sup>1) p.20)</sup>

PEP-Rが幼児の自閉症を対象としているのに対し、12歳以上の自閉症児者を対象とした検査がAAPEP。AAPEPでは、「職業スキル」「自立機能」「余暇活動」「職業行動」「コミュニケーション」「対人行動」の6つの領域において直接観察尺度、家庭尺度、学校作業所尺度の3側面から評価され、PEP-Rと同様「合格」「芽生え反応」「不合格」の3つのカテゴリーに分類する。そして、芽生え反応を示した課題が指導目標となる。

#### 引用・参考文献

1. 梅永雄二編著(2001)自閉症の人のライフサポート TEACCHプログラムに学ぶ. 福村出版.
2. 小林芳文(2003)LD児・ADHD児が蘇る身体運動. 大修館書店.
3. 財満義輝(1995)自閉症児に対する運動を媒介

とした治療教育の試み. 広島修道大学研究叢書 94.

4. 柴真理子(1993)身体表現～からだ・感じて・生きる～. 東京書籍.
5. 全日本特殊教育研究連盟編(1999)自閉児指導のすべて. 日本文化科学社.
6. 恒川すみれ(2005)自閉症児の遊びエリアにおける指導—構造化による不適応行動の軽減. 宇都宮大学教育学部学校教育教員養成課程障害児教育コース障害児教育専攻卒業論文.
7. 麻生武・浜田寿美男編著(2003)人との関係に問題を持つ子どもたち①体と場をつなぐもの. ミネルヴァ書房.
8. 美二三枝子(1998)美二三枝子のダンス・セラピー 体しなやか、心リフレッシュ. 大修館書店.
9. 平井タカネ編著(2006)ダンスセラピー入門. 岩崎学術出版社.
10. 松井洋子(1994)ワークショップ・からだでおはなし 親と子のふれあい体操. 太郎次郎社.
11. 松田岩男総監 松本千代栄監編(1992)ダンスの教育学1 ダンス教育の原論. 徳間書店.
12. 芸術教育研究所編 松樹偕子著(1999)障害児教育&遊びシリーズ3障害児の音楽指導. 黎明書房.